書評

Yves Mayzaud, *Le Sujet Géométrique ou pour une solution de l'union de l'âme et du corps dans la philosophie de R.Descartes*
(L'Harmattan ,2004 ,190p.)

山本俊一郎

本書は、デカルトの形而上学と自然学を合わせた哲学の構造全体が幾何学的比例関係を持った図によって象徴的に表現することができることを論証し、いわゆる心身問題がデカルトの哲学においていかなる位置づけを持っているかを新たな視点から検討することを可能にすることを意図している。そのための準備作業として、デカルトの哲学体系を、l'analogie géometrique（幾何学的類比）と著者の呼ぶ概念によって統一的に解釈することを試みている。

一般にデカルトの著作全体の中で幾何学的類比という概念が直接的に重要であると思われるのは、『精神指導の規則』においてである。そこでは比例、とりわけ等比級数の概念が、代数学と幾何学を統一して、「普遍数学」を構築するための中核的役割を果たすものとして取り扱われる。すなわち、根と平方と立方、そして四則演算を、等比級数のヴァリエーションとして統一的にとらえ、それらの計算はすべて、線や面という連続量によってなされる幾何学的表現に対応しうることがしめされている。デカルトはこのことによって、あらゆる特殊な諸学問についても、比例の本質的特性である「順序」と「計量的関係」によって統一的に説明可能であることを示そうとしたのである。この普遍数学の構想は、「存在の類」を異にする対象を同じ地平の上で取り扱うことが許されないアリストテレスの自然学から脱却し、いわゆる近代的な機械論的自然学を構築する上での核心的なモチーフを含んでいるのである。

本書はアリストテレスやトマス・アクィナスの思想などを参照した上で、比例の概念が代数学と幾何学を媒介するという、単なる数学的な役割のみならず、『省察』で展開される形而上学にもつながる重要なモチーフを含んでいることを考察している。

本稿は、アリストテレスとデカルトの自然学並びに認識論の違いを、「比例」の概念を軸として新たにとらえ直そうとする本書の第１部の内容を紹介する。なお、デカルト哲学の体系を幾何学的図形によって表現することを試みる第２部と第３部については、その試み自体はデカルト理解のために有意義であると思われるが、本書前半で強調される「幾何学的類比」という概念と後半の「幾何学的図形」とをどこまで関連させられるかについては、評者には評価しきれない面があり、読者の判断にゆだねたい。

本書の著者はデカルト以前の、とりわけアリストテレスの自然学と認識論、それを下敷きとしたスコラ哲学を「参照による類推」（une analogie de référence）という概念

によって特徴付けることができるとする。この類推の特質は認識する諸対象間ないし、諸対象と権威ある対象との間に「類似（ressemblance）」している側面があるかどうかを基準にして、対象の真偽を判定したり、推論を進めたりすることを容認するという点にある。経験的に認識される類似点を基準とするこうした参照による類推の例として著者が紹介するのは、「生成」に関する 16 世紀までの一般的な説明である。当時盛んであった錬金術の場面では、化学物質を調合し、新しい化合物を生成しようとするさい、熱を加えることが重要であった。また他方で、腐敗した肉に蝿が群がっていることから、蝿の生成にも熱が重要な役割を果たしており、このことから類推して、一般的に生成には熱の存在が不可欠であると考えられたという。こうした類推の仕方は、生成と熱を結びつけるという漠然とした思考の習慣ないし想像の傾向にのみ基づいているといえよう。著者は、「参照による類推」を可能にする人間の認識能力として、想像力や感覚、記憶が重視されたとする。このような能力によって獲得される認識内容はあくまで経験的であり、スコラ哲学においては普遍的な事柄に関する問題の考察においてもこれらの経験的認識を積み重ねて形成される habitus（習慣）が極めて重要な役割を果たすとされる。この、habitus に基づく判断は科学的知見の発達によって覆される場合が多くなるのが自然であり、このことが、デカルトがアリストテレスの自然学と認識論を批判する際の歴史的背景となっていると思われる。ともかく著者はそうした経験による認識のさらに根本的な性格として「類似」という概念を取り出したのである。

以上の点を踏まえた上で、デカルトが提起したデカルト以前の哲学に対する具体的な批判の論点として著者がおもに検討するのは、学識の権威への批判、アリストテレス論理学におけるシュロギスモス（演繹的推論）の基礎づけに関する批判、アリストテレスの自然学への批判である。

まず、学識（とりわけスコラ学）の権威への批判については学識の内容をすべて頭に入れたとしても、現実に人を悩ませている問題を解決することができなければ、学問としての意味がないという批判を行う。スコラ学の中には豊かな学問的成果が収められているとしても、それを得るための方法を会得できなければ、真の学問とは言えないというのである。デカルトは真の学問を、極論すればたとえ一冊の書物を読まなくとも独力で各個人が探究する知識の獲得を可能にするような、徹底した方法論としてとらえているのである。

シュロギスモスへの批判 は推論の出発点を無批判に受け入れているということに向けられる。シュロギスモスの中での命題間の結合は必然的であるとしても、最初の前提が経験的類推によって得られたものであれば、その真理性は保証できないとデカルトは考えた。

次に、認識に確実性を与える可能性のあるものとして著者は、形相と素材という概念によって構成されるアリストテレスの実体論を検討する。しかし、この考え方においては感覚がそのまま認識対象の反映であるという基本的発想(本書の用語でいう「参照による類推」)の立場に立っており、デカルトが根本的に異なる属性とみなした、精神の性質の一つとしての感覚と物理的対象としての延長を混同しているとされる。この混同をデカルトが批判した例として著者が紹介するのが、神の存在証明に関する『省察』第2答弁の議論である。デカルトはその箇所で、メルセンヌが物体の大きさの類推から、全知全能の神をとらえていることを取り上げ、物体的事物と精神的存在という全く異なる属性を持つ実体を混同していると批判しているのである。

以上の批判をまとめるならば、スコラ学の中では事物の確実性は経験的類推に依存している側面が大きいこと、また、そのような確実性から演繹された知識は、その根拠が経験に依存しているがゆえに、一方では類似点のある諸対象以上にその知識を適用して理解する可能性がなくなり、また他方で、第2答弁の例でみたように、単に感覚的に類似しているように思われても、実際はまったく属性を異にする対象に対して、その知識を適用してしまう危険性があるということである。

以上の批判から、デカルトが理想とする学問の条件として以下の点が明らかになったといえよう。とりわけシュロギスモスへの批判からは、参照による類推に代わる強固な確実性が、そして、学識と、アリストテレスの実体論への批判からは、強固な確実性を出発点として、そこからできる限り同じ程度の確実さを保ちながら、現実に即して正しい判断を導くことのできる方法論が必要であることが明らかとなったのである。

以下で第1部第2章において、確実性の根拠としてのコギト(考える私)の意味と、方法論としての分析の方法の性格を著者がどのようにとらえているかをみたうえで、のちに紹介する分析の方法が参照による類推に代わる、幾何学的類推による認識と対応していることを確認する。

まず著者は、確実性の根拠としてのコギトの位置づけを精神による知性的な認識と身体による感覚的認識の交差する地点におく。確かに精神の存在と物質的事物の存在は互いに独立しているとデカルトは考えるが、それぞれに関する認識については、両方とも精神が行うからである。ここで著者は、私の存在の構造として類比的に三角形を示し、そのうちの頂点の一つを、心身が合一した地点としての私、そこから伸びる二つの辺を、一方を精神による知性的認識、もう一方を身体を介した感覚的認識にたとえている。

著者は、さしあたって、デカルトにとっての認識の確実性は、私の存在に求められていることを確認した上で、もう一つの課

題である方法論の検討に移る。著者はデカルト哲学が採用する方法論を分析的方法と呼ぶ。これはデカルト自身が『方法序説』や『省察』の第２答弁などで説明している方法であって、特に『省察』は形而上学的思考をこの分析の方法に即した形で実践し、そのまま記述したものであるとされる。分析の方法は、用語を最初に定義せず、自らの精神によって感受される明証性に従って推論を進めていくという方法である。この記述方法の対極をなすのが「総合的記述」と呼ばれるものであり、第２答弁に付された『幾何学的叙述』において実践されている。この方法は本書ではあまり触れられていないが、分析の方法を理解する上でも重要と思われるので少し補足しておく。その方法とは、思考、観念といった基本的な用語をあらかじめ定義し、それらの組み合わせから様々な命題を導き出していくというものである。この方法は、誰にも反論を許さないような、必然的な流れとしての推論を進めることができるが、デカルトは、自分が知っていること以上のことを知っているかのように思い込みやすくなるものだと、アリストテレスの論理学に対するのと同じような批判を加えている。実質を伴わない空虚な方法論となる危険を指摘しているのである。

評者はこのような「総合的記述」の仕方と違って、分析の方法による推論を進めていく上では、神等の、あらかじめ定義が与えられていない観念を精神の内で感得するために観想的態度が重要であると考えている。そうした内省の内実を著者は丁寧に検討している。まず出発点として必要なのは純粋直観的な経験である。経験というのはもちろん精神における経験である。コギトの属性は思考であり、その限りでは、身体の感覚的経験なしにコギトを認識しうるとデカルトは考えているからである。そして、この最初の直観からの演繹が続くが、これは感覚や記憶による連関ではなく、直観による明証性が存在するかどうかを基準として、命題を導出していくということである。この分析の方法においては直観による明証性が重要なのであって、これに従って推論を進めることは世界の秩序をそのままたどることにはならないが、最終的に世界の認識の確実性を保証するのはこの分析の方法であるとデカルトは考えていた。そしてこの分析の方法こそが、デカルト以前の参照による類推に代わる特性を備えており、この推論の仕方は、『精神指導の規則』において取り上げられた、等比級数の未知の項目を求める仕方と対応しているのだと著者はいう。

ここでは本書の内容の前半部しか紹介することができなかったが、本書はデカルト以前の自然学と認識論を丁寧に踏まえつつ、『精神指導の規則』において述べられた方法論へのこだわりと比例概念のモチーフの独創性を論じ、それがデカルト哲学全体に息づいていることを明らかにしているのである。